

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「陰翳礼賛」・・・読めますか？で、その意味は・・・～

そうですね。「いんえいらいさん」と読みます。さて、その意味ですが・・・夜桜に光りを当てて花見で酒盛り、お城もライトアップ、クリスマスが近づけば、無数の豆球の明かりで並木を飾ります。新年へのカウントダウン。今の世の中、ライトを浴びせたい傾向がありますね。

現代社会から「闇」は、すっかり追い払われています。住まいを見ても、旧家にあったような薄暗い納戸などはなくなり、太陽光が部屋の隅々まで明るく注ぎ、夜も便利な照明器具のおかげで昼間と変わらないたたずまいです。

谷崎潤一郎の「陰翳礼賛」で説かれた「陰翳」の美しさを感じる心、文化的感覚が失われるのではないかと憂慮しています。谷崎は「陰翳」の象徴として、日本家屋の「障子」と「床の間」を挙げています。柔らかな明かりをもたらす障子と翳（かげ）りをただよわせる床の間の調和によって、室内は外界と一線を画す。そうした場所に入ると、不思議と心が落ち着くものです。

平成に移る頃、九州のある学校で新校舎に障子を用いた小学校が建てられました。もちろん遊び盛りの子どもたちですから騒いで障子を破ることが度々あるであろうと懸念されていましたが、むしろ子どもたちは以前より落ち着きを見せ、障子の張替えもほとんど必要ないとのことでした。

障子の教室が思わぬ教育効果をもたらし、粗暴な行為もなくなっていったそうです。

これらをなくすことができたのは様々な取り組みがあつたのだと思いますが、障子の作り出す空間が子どもの心に一種の浄化作用として働いたのではないのでしょうか。谷崎が「陰翳礼賛」に書いたように、まばゆい外光が障子を通る時、輝度が抑えられて柔らかさでほの白い明りに変化する。子どもの心をあらわにさらけ出す光線ではない、包み込む慈しみの明かりです。

日本の伝統的家屋に潜む力、あらためて見直してみる価値はありそうです。

平成の初め頃、英彦山で実施する二泊三日の研修に、高校生400名を引率した時のことです。

突如進路を変えた台風が直撃し、宿泊先の青年の家は全館が停電。そこで急遽ローソクの明かりを囲んでの班別研修に切り替えました。

プログラムは「親からの手紙/親への手紙」「短歌創作」「懇談」の3つ。「親からの手紙」とは事前に依頼して我が子への思いを綴ってもらう企画。その手紙を現地で生徒に渡し、返信を書かせるのが「親への手紙」になります。そのあと、短歌を課します。こんな歌が詠まれました。

- ・ 函館で 働く父の 手紙来て 気持ち伝わり 涙あふれる
- ・ くらやみに ぼんやり光る ちいさな火 見れば心も ほんわかとなる
- ・ ローソクの 明かりに浮かぶ 友の顔 台風だけど 楽しいつどい

たとえ外は台風でも、期せずして生じた陰翳は、かくも豊かな感性を発露させるのです。

「陰翳礼賛」を再考するゆえんはそこにあります。 「致知」11月号「風の便り」 占部賢志



この年末年始、コロナ禍で減少していた外国人観光客が再び増えてきているのを感じました。多くの外国の方々、日本を訪れ、日本の伝統的な文化や家屋に魅力を感じるのには、「陰翳」による「心の落ち着き」をもとめているからなのかもしれませんね。

まばゆいライトアップもいいですが、「陰翳」を感じる場所にも訪れてみませんか。